

# 春江工

(はるえこう 福井県)

鍛えあげられた精神力の強さと  
守りの固さが自慢！！  
熱い心を持った監督と主将の下、  
最後まで全力を出し切る！！



手を合わせて拝むポーズをする選手たち。練習の前後、試合前などグラウンドに感謝の気持ちを込めて、このポーズをする。

「今日も頑張ります！」  
「よろしくお願いします！」  
元気な声とともに気持ちを込めて手を合わせ、お時間を取ってグラウンドに入る選手たち。

彼らは福井県坂井市春江町に学校がある、県立春江工業高校の硬式野球部員。

**監督への信頼が選手たちを、強くさせる**

グラウンドの隅に立っている監督室には「川村塾」という看板がある。

その言葉通り、川村監督のいる春江工のグラウンドは野球選手として、一人の人間として成長するための修行の場だ。

川村監督は高校は福井商、大学は日本体育大学と名門校で中心選手としてプレー。指導者としては中学では中部日本大会優勝、高校は羽水で県準優勝と結果を出している。

現役時代は勝って当たり前前のチームを見ていたため、指導者になった時に「(選手たちは)こんなことも出来ないのか」と壁に当たる。しかし選手たちに伝わるまで何度も教え、選手から理解出来たという状況を作り結果が出来る。



左上 / 『川村塾』と書かれた看板。人間としても、野球人としても成長できる修行の場だ。  
左下 / 待っている選手も決して気を抜かず、投げる動作を行っている。

右上 / 選手を細かく指導する川村監督。この情熱がチームを強くした。  
右下 / 室内練習場で自主練習をする選手たち。各選手が、連日夜遅くまで残って行っている。

監督の知識や引き出しの多さ、分かるまで応えてくれる人望、選手・指導者としての実績から「監督について行けば大丈夫」と選手たちからも信頼されている。

選手たちはユニホームの上にピブスを着て練習している。1、2、3年、投手で分かれる。3年は引つ張る、2年はつなく、1年は押し上げるとそれぞれの学年に仕事があり、投手にはチームを背負っているという強い責任感、プライドを持たせる。ピブスで分けるのは、それらを意識させる狙いがある。その甲斐あって、試合でも自分の役割に応じて、責任を持って動くようになってきたという。

「シンプルの中に隠し味」（川村監督）というように、練習はシンプルなものが多いがそのなかでも「実はこういった狙いがある」といった要素を持っているものが多い。決められた練習のなかで、「ここはこうすれば良いかな？」と考えるようにして成長する。その上で遅くまで自主練習をやって、自分の足りない所を強化していくのだという。

冬場にはフルメニューという普段の3倍走る練習があるなど、練習量は多い。

「自分たちはこれだけ練習に耐えてきた」というものがあると、粘り強く最後まで諦めないようになり、それが強さになる。（福井商などで）それを経験してきたので、選手たちにも伝えたい」という思いがある。選手たちも「試合中、苦しい時はボケッといれてある『川村塾』と書いてあるゼッケンを握り、今までの厳しい練習を思い出す」と言う。

「強い声、全力でプー、勝負する」という3つの目標を普段から心がけ達成し、それが試合でも出来ればおのずと結果が出る」（川村監督）

山岸選手は「以前は内気だったけど感情が表に出せるようになった」と練習での成長を実感している。

同校は職業学校ということもあり卒業後は就職する生徒が多い。練習や目標には野球を通じて、社会に出て役に立つことを学ばせたいという思いも込められる。

礼儀正しく、しっかりしている彼らだが昨年春、川村監督が部長として赴任してきた当初はまったく違っていた。

「あいさつもしないで、だらだらとしていた。部室も



広いグラウンドで練習をする選手たち。

汚くて、悪いこともしていた」という状況で、「評判が悪かった」と選手たちも認める。まずはあいさつからはじめて、できるまで同じことをしつつこく何回も何回もやらせた。だが、すぐに改善できた訳ではなかった。しかし川村監督の行動が選手を動かす。主将の北恭弥選手が「今までだらだらやっていたのは高校野球とは違う。厳しいけどこれが高校野球だ。ここで変わらないと自分達は強くなれない。ずっとこのままなのは嫌だ」という気持ちを他の選手に訴えかけた。それ以来チームが変わってきたという。

### 制球力抜群のエースと固い守りが魅力

そんな彼らの強みは守備だ。新チーム結成後の春・秋の公式戦9試合。北信越地区の選抜出場校2校(富山・高岡商、福井・敦賀気比)との昨年夏から秋までに行われた練習試合の3試合。計12試合の総失点が27点で1試合平均2.25点。そして1試合の最高失点が4点とデータ上ではあるが、失点が計算できるチームと言える。その要因は「四球をほとんど出さない投手と守りの固い守備陣を持っている」ということ。四球とエラーがゼロに近いなら失点も計算できるということになる。そして練習で養った、強

い気持ちと粘り強さが加わる。守備は「守備と送球練習だけの日がほとんど」という練習で磨かれている。ひとつのベースに数人が立ち、順番で投げるボール回しでは、投げる番ではない選手が他の選手のフォームを見てイメージし、自らも投げる動作を繰り返す。練習を止めて川村監督が手取り足とり指導。選手とデイスカッションをし、分かるまで説明。それを踏まえてまた練習を行う。

そんな濃い練習で育て上げられた守備陣。特に投手・山岸選手、捕手・細川選手、二塁手・高橋選手、遊撃手・北恭弥選手、中堅手・岡本選手らは「センターラインは軸となる人材を置いている」(川村監督)と信頼が厚い。

守りの要になるのはエースの山岸選手。いくら球が速くても、コントロールの悪い投手は使わないという川村監督が「頼れる我がエース」「抜群のコントロール」「普段は1試合2個四球を出したら多すぎるくらい」と絶賛する。

ストリートは初速と終速の差がほとんどない、打ちづらい球質。実際は120キロ台後半だというが、130キロ台終盤が出ているように見え、打者は空振りを繰り返す。そこに3ボールからでも厳しいコースをつく抜群のコントロール、変化球の緩急が加わる。春の県大会では

福井商を5安打に抑えた。登板した秋・春の県大会4試合で34回で34三振と三振も多いが、「三振は意識せず、追いこんだら厳しい所を攻めている。仲間が守りやすいようにテンポ良く投げることを意識している」という。

主将の北恭弥選手は前記のエピソードのように熱い気持ちの持ち主。昨年の秋の県大会は1番を打ちながら2試合ノーヒットで、主将として辛い思いもした。チームに貢献するために、球数を投げさせたり、セーフティバントの構えで相手を揺さぶるなど打席で工夫をしている。それができるのが強みで、春の県大会では7番だったが、打線のつなぎ役として機能した。遊撃手として守りも安定しており「グラウンドの中の監督」と川村監督の信頼も厚い。

春の大会で1番を打った2年生の北剣士郎選手は北恭弥選手の弟。兄と同じく努力家で、セーフティバントも上手く足が速い。格好のトップバッターだ。

2年生捕手・細川選手はもともと捕手をやったことがないが、現在にはリード面を含め総合的に急成長中。春は9番を打っているが打撃も勝負強く「彼の成長がそのままチームの成長」という有望株だ。

そんな春江工の夏の大会の初戦は、武生東との対戦。福井県営球場で、7月17日の13時から開始予定となっている。